

---

## 「総合討論」コメント

金子昭

天理大学おやさと研究所教授・中国文化大学客員教授

---

東京大学のCOEプロジェクトについては、二〇〇二年から開始された第一期「死生学の構築」以来、ずっと注目を持ってきた。今回、中山大学で第二期「死生学の展開と組織化」に基づく「東アジアの死生学へ」の日台国際会議が開催されることは、日台の哲学思想・宗教及び靈性文化の今後の交流をいっそう促す画期的な試みとして、とても期待しているものである。

私は主に倫理学・哲学的人間学を研究してきた。私の宗教的背景は日本の新宗教の一つの天理教であるが、台湾の宗教文化、とくに慈濟については人間仏教の思想に基づく社会参加的な実践に関心を持っている。本務校は日本の天理大学であるが、この九月から中国文化大学日文系に所属しているので、台湾側からの討論者として登壇させていただいた。



金子昭氏

## 楊濟襄氏・余德慧氏・廖欽彬氏に——とくに慈済の実践と死生観に関して

現在、日本の死生学を臨床面で語る際、今年三月十一日に発生した東日本大震災を抜きにして語れない。地震発生直後から、日本の数多くの宗教者がさまざまな救援・支援に立ち上がり、その活動は現在も継続している。そうした活動の背後にある思想は、一九九九年九月二十一日に発生した台湾大地震（九二一大地震）の際の台湾の宗教者の救援思想とも共通するものがあるし、「なぜこのような大災害が起こったのか?」、「なぜこれほどの多くの無辜の人々が苦しまなければならないのか?」、「神や仏は我々人間に何を要求しているのか?」といった、死生観・救済観にかかわる実存的な問いも、両者に共通して挙げられているはずである。

今回の六名（七名）の発表の中では、楊濟襄氏（第二部）が台湾の「父後七日」と日本の「おくりびと」の比較宗教学的な知見の提示をされた。近年、本場の近親者だけでなく、行方家族葬が増えてきた日本であるが、東日本大震災を契機に、家族葬でありながら、それだけに家族の絆をより深める傾向が強まったと聞く。そこで、台湾大地震と東日本大震災の際に見せた震災犠牲者への日台における葬送儀礼的対応ではどのような「死生のイメージ」の類似や相違があるのか? ご存知のところだけでも良いので、この点をぜひお聞きしたいと思う。

台湾大地震でも今回の東日本大震災でも大規模な活動を展開した台湾の「宗教団体」は、慈済（財団法人仏教慈済基金会）である。慈済の活動は、私も岩手県に被災者への支援金配布に同

行して取材した。そのとき、慈済が被災した小中学校の建物を建てると申し入れていた。被災者としては大変ありがたい話であるが、一抹の不安がある。それは、学校を建てることで、その後の教育内容にまで慈済側からのなんらかの指導が入るのではないかと。ということだ。二〇〇九年八月の「八八水害」の後を受けて建設された慈済大愛村で、その宗教文化の違いから先住民の人々が強く反発した事例を思い、私は将来起こるかもしれない文化摩擦の可能性について危惧している。

また、慈済の活動で特筆すべきものの一つが医療分野における積極的なボランティアの参加であり、日本の病院では医療法の関係もあって出来ないようなところまでボランティアが関わっている。これは驚異的であり、感動的でもある。慈済病院では、入院患者の心のケアはもちろん、緊急処置室や手術室や病理解剖や遺体安置所など、いたるところにボランティアが活動している。しかし、専門職としての医師・看護師などのスタッフとは、職務上の衝突や軋轢はないのだろうか？ 公式には両者の関係はうまく行っているとは聞くものの、実際どうなのだろうか？ 職務遂行の際においては、異なる立場のスタッフ同士の間で一種の文化摩擦が発生するものなのだが、どのようにそうした摩擦を解決しているのだろうか？

このような問題関心から、私は、慈済大学の余徳慧氏（第一部）、また田辺元の「死の哲学」と慈済の宗教的世界について比較考察をされた廖欽彬氏（第三部）には、とくに慈済の死生観と救済思想について、①従来の仏教思想にない独自の実践的性格がどこから由来するのか、あらためて確認の意味も込めて伺いたい。またあわせて、②慈済の活動がグローバル化することで、さまざまな文化的摩擦が発生しているはずであるので、そのあたりの事例と解決策についてもお聞きできればと思う。

## 池澤優氏・竹内整一氏・一ノ瀬正樹氏に——感覚（道徳感情）への諸々の問い

宗教は今日、どの国においても「部分社会」であり、決して特定の宗教の教えが社会全体を覆っているわけではない。それどころか宗教の内部でさえ価値が多元化している現実もある。例えば天理教の内部では、脳死・臓器移植の賛否をめぐる議論が今なお続いている（しかも同じ教理から正反対の見解が出ることもある）。けれども、そのことはむしろ単純に二元的な結論を出してこれを自らの公式見解としている宗教よりは、信仰に基づく多元的選択の余地があつて、ずっと懐が深いと言ふことも可能であろう。

しかし、その一方で「全体社会」の枠組みだけの形式的合意事項だけとする市民社会の倫理に対して、多元的な価値の源泉を提示することができるのではないだろうか？ 市民社会もそれなりに実質的な価値の枠組みはあるが、それに時には抵触することがあつても、それぞれの超越的根拠から発言することができる（ときには身を持つて生き様として示す）ところに、宗教的な生命倫理の価値があると、私は考える。市民社会の倫理に決して成ることができないというのが問題なのではなく、逆に常に市民社会と異なるものとして自らの存在を訴えるところに宗教的価値観の問題提起としての存在意義があるのである。

実際、日本の諸宗教団では、異なる宗教者同士が教団布置研究所懇話会というグループを組織している。同会は毎年のように日本生命倫理学会でシンポジウムを自主企画して、教えは相互に異なるにせよ宗教からの提言として脳死・臓器移植や尊厳死問題などでの問題提起を行ってきた。その問題提起の中には、まさに池澤優氏（第三部）が強調された「標準的生命倫理言説（パーソン論）」を超える対抗言説の多くが含まれている。ただ、その場合、日本の宗教だからこそ、教えは異なっても共有できる「感覚（道徳感情）」があり、その一方で例えば同じ仏教者同士でも、脳死・臓器移植に全面的に賛成し積極的に自らの病院でも推進している慈濟

とは、「感覚（道徳感情）」に相当へだたりがあるように思う。

では、宗教的な「感覚（道徳感情）」と国家や民族の文化的な「感覚（道徳感情）」は、東アジアにおいては今後どちらが優勢になると見ているのか？ エンゲルハートの言うように、両者はともに相対化されてエキューメニカルなスピリチュアリティとして拡散してしまうのであろうか？ 私は国家が国家であること、宗教が宗教であることを止めないかぎり、そのような相対化は限界があると考えている。その点を、池澤氏には、「東アジアの死生学へ」という大テーマの下で池澤氏自身の展望も含めてお聞きしたい。

今回、日本国内に独自の宗教文化的な「感覚（道徳感情）」について、東日本大震災での日本人の対応の背後にある死生観を詳しく紹介されたのは、竹内整一氏（第一部）である。ご発表の中では、「無常観」にあつてなおかつ「人間の荘厳さ」を強調された。宗教文化は日本においても多元的であり、ここで指摘された「無常観」とは異質な、もつと世界人生肯定的な志向も、日本の伝統的の死生観の中にある。鎌倉新仏教の日蓮や、幕末維新期の民衆宗教の思想にそれが能動的な「世直し」思想として現れている。東日本大震災での日本の諸宗教の積極的な救援活動を見ても、決して「前のめりの科学・技術」対「日本的「はかなさ」」の図式で受け止めたとは考えられない。

ただ単に慈母・厳父として自然を受動的に受け入れている／受け入れるべきだという側面だけではないと思う。大災害が自分たちの生活を大規模に直撃したということそのことが、人々をして自然の「子ども」たる人間への警告として受け取り、自分たちが築いてきた文明・文化、ライフスタイルを自分の「父母」の思いに即したものに変わっていくべきだという能動的な問題提起と実践へと駆り立てている点もあるのではなからうか？

そうした日本宗教の世界人生肯定的な倫理思想の側面について、竹内氏にあらためて確認したいと思う。

最後に、今日の死生学は、いわゆる理系・文系の壁を超えたところで問い直されなければならないものでもある。その意味でも、一ノ瀬正樹氏（第一部）による「日本における低線量被曝論争の構図」をめぐるご発表は、文系からいかに理系の専門領域に深く精密に迫れるかを示した優れた内容である。多くの人々は、ベクレルやシーベルト、またICRPの勧告基準などについてどれだけ正確な科学的知見を持って、福島第一原発の放射能漏れの議論をしているか、おおいに疑問があるところだろう。そしておそらく今後、どこまでそうした議論が可能か非常に心もとないところがある。

それは、放射能・放射線というものが人間の感覚を素通りしてしまうという性格にあり、そこには日本人として、いや人間としての感覚（道徳感情）がどうしても実感できない見えない脅威になっているからである。「原発被害」と「原発の風評被害」との間は想像以上に深いところにつながっている。それゆえ、人々の「安心」が「安全」にたどりつくことはどうあっても不可能ではないか？ 一ノ瀬氏は、そのことをじゅうぶん理解しつつ、可能なかぎり低線量被曝の基準値についての問題を分かりやすく読み説いてくれた。

しかし、ひるがえって考えてみると、唯一の被爆国の国民として、放射能の潜在的な危険性については十分頭で分かっているのに、大事故が起るまでずると原発をここまで普及させてきた国こそ、まさに日本であった。もしかして実はここにこそ、日本人の感覚（道徳感情）がじゅうぶんに対応できてこなかった問題があるのではないだろうか？ たしかに今回の原発事故により我々は「未体験ゾーン」に足を踏み入れたかもしれないが、むしろ我々一人ひとりの中において、頭で理解してきた危険性の認識と感覚（道徳感情）の乖離の問題を人文学が掘り下げるべきではなからうか？ 日本の場合、過去の原発受容の経過を振り返ることの必要性の中で見えてくるものが、いろいろとあるのではないだろうか？ そのあたりの問題を、一ノ瀬氏にうかがいたいと思う。